

微笑みの国、タイでの3年間をふり返って

前 バンコク日本人学校 教諭

現 今金町立今金小学校 教諭 黒川 貴功

1 タイの概要

公用語：タイ語

首都：バンコク

通貨：タイバーツ（1バーツ、約2.8円）

国王：プーミポン国王（ラーマ9世）

首相：アピシット首相

人口：6600万人（2010年）

宗教：仏教（上座部仏教）93.9%、イスラム教5.2%、その他キリスト教、ヒンズー教など



<立憲君主制の国家>

タイは立憲君主制の国であり、国王や王族は国民にとっても尊敬される存在である。町の至る所に国王や王妃の肖像画が飾られ、国王や王妃の誕生日は国中で祝う。

コンサートや学校の運動会の開会式、卒業式でも国王賛歌が流される。運動会の開会式の際、国王賛歌が流れている間は教員も動くことが許されず、新しく赴任した教員は曲中に思わず児童の指導を行い、逆に先輩教員から指導を受けることがある。

国旗や王族の旗も同様に大切に扱われ、運動会等で児童生徒が国旗を持って入場する際に、絶対に地面につかないように指導する。タイの国旗は、中央の青線を白線が上下に囲み、さらに赤線がその外側を囲む。青は国王、白は宗教、赤は国家、国民の団結心を表している。

<地理と気候>

タイには全部で76個の県があり、国土を大きく分けると6つの地域（中央平野部 北山岳部 東北高原部 東海岸部 西山岳部 南半島部）に分けることができる。西と北にミャンマー、北東にラオス、東にカンボジア、南にマレーシアと国境を接している。国土面積は513,115平方キロメートルで、日本の約1.4倍。国土面積の約40%を農地が占めている。

1年中大変暑いのが、モンスーンの影響を受けるために、いくつかの季節に分かれている。4月は「暑季」と言われ一番暑く、真夏中の真夏である。5月から10月頃は湿気が多く、スコールが降るため「雨季」となる。雨季と言っても日本の梅雨のようなものではなく、日中は非常に暑く午後猛烈な雨が降るのである。町の至る所で一時的な洪水となり、道路に30センチ以上水がたまってしまふところもある。しかし、雨季は果物の季節でもある。11月から3月までは雨がほとんど降らず、涼しくなるので「寒季」となる。バンコクでも朝晩は半袖では肌寒い。しかし日中はとても暑い。地域によって気温は異なる。山間部はかなり涼しい。

<国民>

「微笑みの国」と呼ばれるように、タイ人は温厚である。道行く人にも笑顔で接してくれ

る人たちである。目上の人を敬い、礼儀正しい人柄である。また、子どもをととても大切にしている。

タイ族 75%、華人 14%、その他マレー系、インド系、モン族、カレン族などがある。中国系の看板を町中でよく見かけるのは、華人が多いからである。

<宗教>

タイ人の多くは仏教徒であり、仏教徒関わりの深い生活を送っている。町の至る所に金色の装飾をした寺（ワット）があり、お参りをしたりお供えをしたりする人が絶えない。町中を僧侶が托鉢をして歩く姿は、タイの朝のいつもの風景である。僧侶に女性が触れることは絶対に許されず、托鉢の場合は近くの男性に頼んで渡してもらう。

タイのあいさつは「ワイ」という合掌をして「サワディー・カップ（女性はカー）」と言う。このワイの形は本来、仏教で大切にされる花、蓮のつぼみをイメージしているそうである。

仏教に関係する祝日も多く、その日は酒類の販売が禁止される。下の王室関係の祝日と憲法記念日以外は仏教に関わる祝日である。仏教に関わる祝日は、月の動きで決まるため、日付が年によって変わる場合がある。

- 2月 13日 ワンマーカブチャー（万仏節）
- 4月 6日 ワンチャクリー（王朝記念日）
- 4月 13~15日 ワンソクラーン（タイ正月）
- 5月 5日 ワンチャトラモンコン（国王御即位記念日）
- 5月 12日 ウィサカブチャー（仏誕節）
- 7月 10日 ワンアーサーラハブチャー（三宝節）
- 7月 11日 ワンカオパンサー（入安居）
- 8月 12日 王妃誕生日
- 10月 7日 ワンオークパンサー（出安居）
- 10月 23日 ワンピヤマハーラート（チュラロンコーン大王記念日）
- 11月 5日 ワンローイクラトン（灯籠流し）
- 12月 5日 国王誕生日
- 12月 10日 ワンプララーチャターンラッタタマヌーン（憲法記念日）



2 バンコク日本人学校の概要

本校は、1926年（大正15年）創立の盤谷日本尋常小学校（1927年[昭和2年]からは盤谷日本国民学校に改称）を前身とする、日本人学校の中で最も長い歴史を誇る学校である。1972年にバンコク日本人学校と改称し、1974年からは泰日協会が設置者となり、泰日協会学校（通称バンコク日本人学校）としてタイ国政府から正式に義務教育学校としての認可を得た。

児童生徒数はおよそ2450人。毎日のように編入者、退学者があるので、児童生徒数は変動しつづける。児童生徒数の規模では世界でも有数の日本人学校である。

2009年4月よりチョンブリ県シラチャ市に姉妹校として泰日協会学校シラチャ校（通称シラチャ日本人学校）を開校した。

* 泰日協会とは1928年に設立された「日泰両国の文化の融合と、両国の友好と福祉を推進する」ことを目的とする日タイの友好・親善・協力団体である。本校の保護者は泰日協会の会員または賛助会員となることになっている。

<校訓>

「広い心で 明るく なかよく たくましく」 昭和37年9月1日制定

<教育目標>

豊かな広い心をもった子どもを育てるために

- (1) 思いやりのある子 (徳 育)
- (2) 創造性を発揮し、積極的に学ぶ子 (知 育)
- (3) 心身の健康をつくる子 (健 康)
- (4) 国際性豊かな子 (国際性)



<目指す学校像>

「安心して学び、通うことができる学校」

「確かな学力と豊かな国際性を身に付ける学校」

3 バンコク日本人学校での特色ある教育

<交流学習会>

タイの学校との交流学習がすべての学年で行われている。1, 2年生はカセサート校、3, 4年生はドラカム校、5, 6年生はシーナカリン校、中学部はチュラロンコン大学附属中学校と、学年によって交流する学校は異なる。毎年順番にホスト校、ゲスト校となり、お互いの学校を会場として交流会を行う。ホスト校となった場合は、自分たちの国の文化や遊びを紹介し、楽しく過ごす。ゲスト校となった場合は、ホスト校にお邪魔して、その国の文化に触れる。6年生の修学旅行では、チェンマイに飛行機で行き、メーゲットノイ校の同様の交流を行う。



短時間の交流ではあるが、児童生徒は入念に準備と練習を重ね、日本の文化を熱心に紹介して楽しんでもらおうとする。授業で習ったタイ語を何とか話し、ややぎこちないものの、国際理解のおもしろさと難しさを肌で感じることができる。

<タイ語の授業>

バンコク日本人学校はタイの私立学校であるため、タイ文部省よりタイ後の授業が義務づけられている。日本語が堪能なタイ人教員により、会話を中心に学んでいる。中学部では選択授業で、タイ文字を学ぶこともできる。

タイ語の授業では、言葉だけでなく、タイの文化や習慣、お祭り、時事などについても学

ぶことができる。タイにある学校とは言え、校内は日本の学校とさほど変わらない。ただ、タイ語の時間は、タイにいると実感できる。

児童生徒の中には、保護者がタイ人である場合もあり、そういう子どもたちにとってはやや退屈な授業とも言える。

<日本語補習>

本校の入学条件として「日本語による教育が可能であること」が求められるが、中には日本語の習得がやや不十分な児童もいる。そこで、小学部1，2年生の希望者を対象として日本語指導を年間25時間行っている。「にほんごをまなぼう」文部科学省の日本語指導教材を使って簡単な日本語の学習や、カルタ、読み聞かせなどを通して楽しく学んでいる。

<日本語特別指導「ことばの時間」>

(1) 「ことば」の指導のねらい

海外で生活している本校児童は、日本にいる児童に比べて日本語に触れる機会が必然的に少なくなる。そこで、海外で生活していることによる日本語習得の上でのデメリットを補うために、特別なカリキュラムを構成し、日本語力の向上を図る。

(2) 指導上の留意点

- ・児童の実態に合わせて柔軟に学習内容を選び、また個人の能力に合わせた目標が設定できるようにする。
- ・学年間の系統性を明確にして、6年間通して力を伸ばしていけるようにする。
- ・児童の変容を見て取れるよう、学習の足跡をファイリングしておく。
- ・原稿用紙の使い方と、作文表現の技法の指導に偏らず、書くことに抵抗なく、すらすらと書くことができることを目指す。
- ・指導の時間よりも書く時間を多くとるようにする。

(3) 指導内容

① 「朝読書」「読み聞かせ」(毎週月・木曜日の8:00~8:10)

- ・読書や読み聞かせを行い、日本語のリズムや響きを感じ取る。
- 日本語に触れる機会を多くするためだけでなく、想像力や思考力を高めることができる。
- 読書に興味をもち、意欲的に読書に取り組むようになることが期待できる。

② 「書く力」の定着を図る学習活動(毎週火曜日の8:00~8:15)

- ・「書く力」を身に付けることに重点を置き、くり返し訓練することで、日本語力を高めていく。
- 書くことで自分の思考をまとめたり深めたりできる上、「話す」「聞く」といった音声言語よりも言葉と落ち着いて向き合うことができる。
- 書くことは、学習の足跡が蓄積され、児童自身にも書く力が向上していることが実感しやすい。
- 系統性のある指導がしやすく、個人のペースで書く力を向上させていくことができる。(自分にあった目標を設定できるので、意欲が高まる。)

(4)「書く力」の系統性

学年	原稿用紙の使い方	文の構成	文章表現・技法
1年	「、」「。」のつかいかた (打ち方、原稿用紙のま す内での書き方) 1マス空けて書き始める。	理由を書く。「それは・・・ だからです。」	思ったこと、感じたこと を積極的に書く。「・・・ と思いました。」
2年		順序よく書く。(接続詞の使 い方「はじめに」「つぎに」 「さいごに」など)	
3年	段落の分け方(行の替え方) 「会話文」の書き方	はじめ・中・終わりに分け て書く。(段落3つ)	「会話文」を効果的に入れ る。 比喩を効果的に用いる。 五感で感じたことを盛り 込む。
4年			
5年		段落の構成を気をつけて書 く。(起承転結)	自分の思いを、分かりや すく伝わるように書く。 書くことで、自分の考え を深める。
6年		要旨をはっきりさせて書く。	

*とても基本的内容であるが、十分に身に付けている児童はさほど多くない。一つ一つの内容に何度も繰り返し取り組み、確実に身に付けていく。

*作文を書く上でのテクニックはさほど重視せず、時間内に書く内容をすぐに決め、たくさん文章を書くことができるようにする。書くことへの抵抗がなくなると、国語での作文指導が効果的に行える。

(4) 中学部での日本語特別指導の指導内容

- ①バス待ち漢字学習：週2回（毎週火・木曜日）、帰りの会からバス放送までの時間
- ②生活ノート・テーマ作文：基本的に土曜日または日曜日
- ③「今週の言葉」：教師が好きな言葉・中学生に覚えさせたい言葉を伝える。

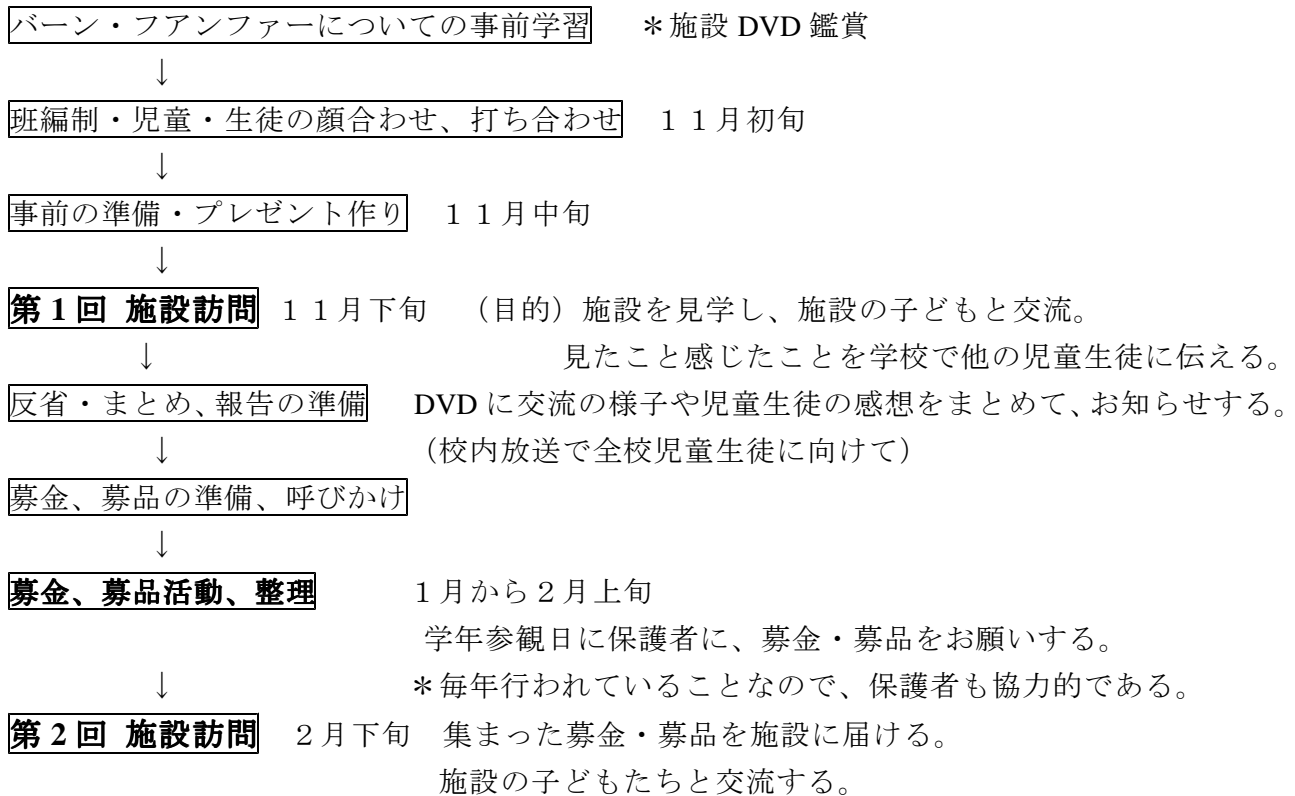
小学部での活動と中学部での活動の系統性が確立できず、苦心してきた。小学部での学年間の系統性を確立したのも最近で、今後、小中学部通した活動としていくことが課題である。活動時間や児童生徒の発達段階など、簡単につなぐことは難しいが、内容的に似ているところもあり、中学部の日本語指導担当の教員も課題の改善に意欲的である。

<バーン・フアンファー（知能及び脳障害乳幼児援助施設）援助活動>

ノントブリ県パークレット郡にある知能及び脳障害乳幼児援助施設、バーン・フアンファー（ブーゲンビリアの家）と本校とは10年以上交流をつづけている。この施設は、様々な障害を持ち、家庭で育てることができなくなった子どもが暮らす施設である。以前はJICAから派遣された隊員も活動していた。

小学部のボランティア委員会と中学部の生徒会が協力し、全校児童の保護者から、不要な日用品や服などを寄付してもらい、施設に届けている。募金も合わせて行う。

(1) 活動の流れ



バーン・フアンファーの施設では、本校の募金・募品を大変喜んでくださる。参加できるのはボランティア委員会と生徒会、その他希望者をあわせて 80 名ほどであるが、参加者は活動と通して大きな達成感を感じることができている。



5 タイでの生活について

<生活しやすい点>

(1) 物価が安いこと

タクシーに乗った際、買い物や通勤なら 100B (約 300 円) 以上かかることは滅多になく、スワンナプーム空港まででも、200B 程度で行ける。携帯電話は GSM 携帯で、電話機を購入すれば (1000B 程度から) 通話料は月額 500B 程度で足りる。もちろん、使用方法によって一概には言えないが、日本のように料金を気にすることも少ない。食事についても、日本と同じ味の日本食を食べようと思うと (日本食風の日本食店も多い)、日本と同じあるいはやや割高になることもある。ただ、タイ料理を屋台や現地のタイ人向けの食堂で食べると、本当に安く食べることができる。(焼き肉食べ放題が 109B : 約 330 円、お気に入りの店だった。) タイ料理のレストランも外国人向けの店や、高級レストランではかなり高額になる。食材や果物等も同じで、現地のタイ人が買う店や市場で買えばかなり安くなるが、外国人向けのスーパーではさほど安くない。

つまり、物価が 2 種類 (あるいはそれ以上) あり、単純に日本の物価と比較することはできない。しかし、タイの生活になじむほど、安く生活ができる。

(2) 子どもに優しい人柄

タイの人は、子どもに大変優しい。親は子どもをととても大切に愛情を持って大切に育てていると感じる。日本人の子どもにもとても優しく接してくれる。わが家には2人の子どもがいるが、レストランやお店などで店員が子どもと遊んでくれることがよくある。その間に親はゆっくりと食事や買い物ができる。日本人の子どもが少しタイ語を使ったりすると、とても喜ぶ。モノレールや地下鉄、バスなどに子どもを連れて乗ったら、すぐに席を譲ってもらえる。その態度があまりに自然で、心が温まる思いがした。そんなタイの人たちの子ども好きの人柄に何度となく助けられた。

ただ、子どもに優しい分、子どものマナー違反に寛容な面もある。子どもなら少しくらい公共の場で騒いでもの、さほどそれをとがめる雰囲気はない。スーパーでカートの中に子どもが入っていることも、よく見られる。そのため、帰国の際、公共のマナーについて改めてしつけ直す必要を感じた。

(3) バンコクについて

バンコクには世界中の人たちが集まっているため、ものが大変豊富である。日本の製品も割高ではあるが、何でも手に入る。大型のデパートやスーパー、市場、商店街があり、大変高価なものもあれば、多少質は落ちるが安いものもたくさんあった。中国人街の市場（ヤワラート）やウィークエンドマーケット（チャトチャ）は、迷い込んだら出られない、案内人がいないと目的の店にたどり着けない、そんな場所であった。

世界中の人々が集まるため、世界中の本格的な料理が食べられる。ドイツ料理やイタリア料理は大変おいしく、よく食べに行った。

(4) 治安が良い

時間や場所によって違いはあるが、バンコクでの日本人の生活圏は比較的治安が良かった。深夜まで人通りも多く、明るい。マンションには24時間守衛さんがいて、マンションの入り口で出入りする人をチェックしている。

地方に旅行に行っても、命を取られるような危険な目に遭うことは一度もなかった。

しかし、派遣教員の中にはタクシー内で暴行を受けたり、スリに鞆を切られたりした経験を持っている人もいた。また、タクシーに夜遅く女性一人で乗ることはやはりお勧めできない。ある程度の危機意識をしっかりと持っていれば、普通に生活する分には安全である。

<生活しづらい点>

日本でない以上、生活しづらい点は多々あるが、特に「タイならではの」と思われる点について紹介する。

(1) 時間にルーズな点

バンコク日本人学校では、自家用車を自分で運転することは、様々な理由から許されない。そこでタイ人の運転手を雇うわけだが、なかなか時間通りに来てくれないことがある。長く日本人の運転手として働いた経験のある運転手は時間をしっかりと守ってくれるのだが、新しい運転手ではそうならないことがある。通勤で遅れるわけにはいかないので、そういう場合は少し早めに時間を言うか、運転手を替えるかである。赴任当初の私の運転手はとても親切な方だったが時間を守れないことが何度もあり、残念ながら替えざるを得なかった。

しかし、学校やマンションなどで日本人と仕事をしている人は、日本人の時間の正確さを理解しているのでさほど問題がない。

(2) 食品の衛生に対する意識の違い

タイに赴任して最初の半年は、おなかを壊すことが多かった。サルモネラ菌に感染して下痢と嘔吐を繰り返して苦しんだこともあった。

暑い国なので食品が腐りやすいのは仕方がないが、市場や屋台では肉を冷蔵することもなくそこに置いているのを見かける。もちろんスーパーでは日本と同じようにパックに入れて冷蔵して売っている。しかし、スーパーに来る前はとうだったのか、確かめるすべはない。

しかし、半年も過ぎると、おなかを壊してもさほどひどくもならなくなった。また、少しくらい壊しても、気にならなくなった。ただ、食事をしていて、「あれ？」と思ったらすぐにはき出せるようになった。無意識に、警戒しながら食事ができるようになったのである。そうすると、タイの食事がとても楽しく、おいしくなった。屋台のカキ料理でもおいしく食べることができた。(これは他の日本人学校仲間に止められるが。)

日本に帰国すると、清潔・無菌・除菌に神経質になっていることが、逆に違和感を感じた。タマゴ一つ一つに精算日をプリントしていることが、なんとなく許せない思いだった。

(3) トイレの様式

便器が和式とも様式とも違う、とてもシンプルな形である。場合によっては、そこはシャワー室も兼ねていて、水浸しになっていることもある。水洗ではあるが、手桶で水を流すというもの。紙は流さず、使用後に横のゴミ箱に入れる。外国人が多い都市部では普通のきれいなトイレがあるが、少し郊外に行くとスーパーでもタイ式のトイレになる。様式が違うことは仕方がないが、掃除が不十分な場合が多く、ここで書くことはばかられるトイレに幾度となく出会った。大人はまだ我慢できるのだが、子ども、特に幼児は嫌がった。

6 派遣教員を支えるマップラオの会

日本人学校には100人を超える教職員がいて、日々の激務を協力し合ってこなしている。学年ごとに、分掌ごとに力を合わせて、職務を遂行してきた。帰宅が遅くなることも珍しくなかったが、互いに補い合い、支え合うことでやり遂げることができた3年間であった。

しかし、それは自分が教員である以上、在外教育施設を希望した以上、受け入れることはさほどつらいものではなかった。得るものも多く、多くのことを学び、自分の力とすることができたからである。

ただ、早朝から深夜までの勤務が日常的な中、家族のことが心配になることがあった。日本と違って、実家に子どもを預けたり、世話を頼んだりすることもできない。気晴らしに、外を出歩くことも日本のようなわけにはいかない。きっと、窮屈な生活をさせた時期もあったと思う。しかし、そんなときわが家を支えてくれたのが、派遣教員の配偶者の会(マップラオの会)である。話し合いやバザーなどのイベントで忙しいこともあるそうだが、「マップ」のみなさんが私の家族を支えてくださったおかげで、3年間を無事に、楽しく過ごすことができたと言っても過言ではない。